

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32517

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K17534

研究課題名（和文）アディクションの根本原因としての機能不全家族の特性の解明と看護介入方法の検討

研究課題名（英文）The elucidation of the characteristic of the dysfunctioning family as the primary cause of addiction and investigation of the nursing intervention method

研究代表者

日下 修一（Kusaka, Shuichi）

聖徳大学・看護学部・教授

研究者番号：00566614

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：アディクションは暴力、自殺など様々な社会問題を引き起こすものである。本研究はアディクションを統合した観点から捉え、アディクションの根本原因には機能不全家族の問題があることを明確にし、どの程度の機能不全家族の問題が薬物依存などの依存症を引き起こすのかを明らかにするものである。インタビュー調査および質問紙調査によって、アルコール依存症者、薬物依存症者、ギャンブル依存症者はいずれも機能不全家族の問題を抱えているが、内容に差があり、大きな問題を抱えているとより重大な依存症を生じることが明らかになった。

依存症の回復方法について、機能不全家族の問題の解決が有効であることを示すことが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

依存症の背景に機能不全家族の問題があるといわれているが、学術的調査は少ない。今回の調査により、機能不全家族の問題、特に養育者の児童に対する関わりの問題が依存症などを生むことが明確になったことは学術的にも、社会的にも意義がある。

依存症の回復のために、機能不全家族の問題からの回復を目指すことで、依存症を根本から回復できる可能性が示されたことの社会的意義も大きい。

具体的な回復方法として、自分を褒めることなど具体的な方法を質問紙およびインタビュー調査を用いて検討したことで、看護師が介入できる範囲で新たな回復方法の方向性を示せたことは学術的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：Addiction causes various social problems, such as violence and suicide. This studies research from a viewpoint which unified addiction, carry out determinately that an insufficiency family's problem is one of the primary causes of addiction, and show clearly what insufficiency family in question develops dependence, such as a drug dependence. Although each of alcohol dependence persons, drug dependence persons, and gamble dependence persons had an insufficiency family's problem by interview investigation and question paper investigation, when the contents have a difference and it had the big problem, it became clear to produce more serious dependence.

About the revivification method of dependence, it was able to be shown that solution of an insufficiency family's problem is effective.

研究分野：家族看護学、精神看護学

キーワード：機能不全家族 依存症 回復 自助グループ 養育者

1. 研究開始当初の背景

アルコール依存症者、薬物依存症者、ギャンブル依存症者等の依存症及び児童虐待、DV (ドメスティック・バイオレンス)、摂食障害など依存症関連問題を含むアディクションの根本原因として「一次嗜癪」という概念があり、様々なアディクションは「一次嗜癪」から「二次嗜癪」へと移行して生じるものであると考えることができる。

A・W・シェフ (Schaeff)、斎藤学、遠藤優子らはアディクションを一次嗜癪と二次嗜癪に分け、一次嗜癪は愛着形成に問題を生じた者が「見捨てられ不安」などの不安・満たされない思い・寂しさを根底に抱えることにより、愛着欲求、愛情欲求が満たされず、苦痛を生じ、この苦痛から目をそらし、生き延びるためにアルコール依存症や薬物依存症、ギャンブル依存症、摂食障害、児童虐待、DV などの様々な依存症を生じる二次嗜癪に発展していくとしている (A・W・シェフ著、斎藤学監訳、『嗜癪する社会』、誠信書房、1993年、副田あけみ・遠藤優子編著『嗜癪問題と家族関係問題への専門的援助 - 私的相談機関における取り組み - 』、ミネルヴァ書房、1998年)。しかし、この考え方は依存症の治療の実践活動の中から生じたため、一次嗜癪と二次嗜癪に関する学術研究は国内外いずれでもほとんどなされていない。

アディクションは暴力、自殺など様々な社会問題を引き起こすものであり、その対処について、認知行動療法など様々なアプローチがなされているが、アルコール依存症、薬物依存症など個々の依存症に対するものであり、共通したアプローチは少ない。学術研究も主に個々のアディクションに対するものであり、統合した観点から捉えた研究は少ない。

一次嗜癪の問題を軽減することによって、薬物依存症や児童虐待などの様々な依存症関連問題を解決することができる。しかし、一次嗜癪を科学的に検討した研究は見当たらず、明確に機能不全家族の問題と一次嗜癪の関連性を検討した研究もないため、科学的な検証が必要であると考え、機能不全の問題を抱えた依存症者・家族、児童養護施設で養育された方々、矯正施設に収容されている方々を対象として検証することとした。

本研究ではアディクションを統合した観点から捉え、以下の3点を学術的「問い」とする。

一次嗜癪の背景には機能不全家族の問題があることを明確にし、機能不全家族の問題の程度により、薬物依存などの依存症あるいは児童虐待をどの程度、引き起こすのかを問う。

薬物依存症などの依存症や児童虐待の予防に必要な機能不全家族の問題の解決の要素は何かを問う。

に基づき、機能不全家族に対する評価尺度を考案し、看護職が行える具体的な介入の方法または方向性は何かを問う。

本研究はアディクションを統合した観点から捉え、アディクションの根本原因には機能不全家族の問題があることを明確にし、どの程度の機能不全家族の問題が薬物依存などの依存症あるいは児童虐待を引き起こすのかを明らかにする。さらに、薬物依存症などの依存症や児童虐待の予防に必要な機能不全家族の問題の解決の要素を明らかにすると共に、機能不全家族に対する評価尺度を考案し、看護職が行える介入の方向性を検討し、依存症者とその家族、児童虐待加害者及び被害者の回復の具体策を提案することを目的としていた。

2. 研究の目的

本研究はアディクションを統合した観点から捉え、アディクションの根本原因には機能不全家族の問題があることを明確にし、どの程度の機能不全家族の問題が薬物依存などの依存症などを引き起こすのかを明らかにする。さらに、薬物依存症などの依存症および児童虐待の予防に必要な機能不全家族の問題の解決の要素を明らかにすると共に、機能不全家族に対する看護職が行える介入の方向性を探求することを目的とした。

3. 研究の方法

自助グループを中心として、依存症者、依存症者を支える家族に対して、アンケート調査を実施し、統計分析を行った。また、同様に、自助グループを中心として、インタビュー調査を実施し、インタビュー内容について内容分析を行った。対象とした自助グループは断酒会、DARC であり、ギャンブル依存症者、クレプトマニアなどの回答者は他の依存症と合併するか、自助グループの家族などであり、当初の調査対象範囲内であった。調査に先立ち、所属大学の倫理審査を受け、倫理的配慮を徹底しながら、調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

アンケート調査について

アンケート調査ではアルコール依存症者、薬物依存症者、ギャンブル依存症者、共依存家族などの依存症者および家族 210 名から回答を得た。依存症の種類によって回答の差があり、養育者の態度について、「門限などの家庭内ルールを決めた」がアルコール依存症者および薬物依存症者で有意差が認められ、「ほとんど褒めなかった」が薬物依存症者で、「何を言っても否定的に捉

えた」がギャンブル依存症者で有意差が認められた。つまり、親、養育者の関わり方により、なりやすい依存症が決まる可能性が示唆された。このことは親、養育者の関わり方次第で、依存症者を生じない可能性も示唆するものである。

子どもの頃と現在の回復過程にある依存症者の思いについて比較した結果。アルコール依存症者では「自分の問題を他人に話せなかった」「何かあると人のせいにした」が子どもの頃に有意差が認められたが、現在ではなくなっており、回復が図られてきていることを示した。薬物依存症者では「孤独に感じるが多かった」「何度も家出しようと思ったことがあった」「親の問題の原因は自分だと思った」「理不尽に叱られるが多かった」「人付き合いが苦手であった」「親に甘えなかったができなかった」が子どもの頃にあったが、回復途上の現在ではなくなっており、回復が図られてきていることを示した。ギャンブル依存症では「親がしばしば喧嘩していた」「親の問題の原因は自分だと思った」「自分の問題を他人に話せなかった」「自己を犠牲にして家族・友人に尽くした」「いつも他人の目を気にしていた」「自分がよい子でなければならないと思った」「人との深い関係を作ることが苦手だった」が子どもの頃にあったが、回復途上の現在ではなくなっており、回復が図られてきていることを示した。しかし、「ほめられたいので、頑張ることが多かった」「何かあると人のせいにした」は子どもの頃から始まり、現在でも存在していた。行為依存であるギャンブル依存症では承認欲求に基づく傾向の回復には時間が必要であることが分かった。

依存症者がこのように考える原因として、「子供の頃の家庭外の環境の影響が大きい」「親が関わってくれる時間が短かった」「親の言う通りに生きようと思った」「親に見捨てられないように生きてきた」が挙げられ、機能不全家族の問題が大きな影響を与えていることが明確になった。現在の状況について、「新たな人生を見つけた」「対人関係が良くなった」「友人の世話を焼くことが多くなった」「嘘をつかなくなった」「昔の自分の問題を振り返れる」「昔のことから学ぶことがある」「問題行動を起こすことはない」等を挙げ、依存症からの回復を示す考え方が示された。

回復の方向性として、「できない自分・悪い自分を認めることができる」「自分の悪い面、良い面を理解できる」「『人のせい』という責任逃れの考え方をやめる」「他人は思い通りにならないことを理解する」「自分で自分を客観的に褒める」等が明確になり、回復の手段の方向性が明らかになった。

インタビュー調査について

インタビュー調査では13名の依存症者から回答が得られた。薬物依存症者、ギャンブル依存症者など様々な依存症者がいた。様々な形の親子関係の問題が存在し、例えば、薬物依存症者では、子ども時代に母親が子に当たった際に、父親は浮気をしているのだというようなことを平然と語り、夫婦の破綻を子に伝えると共に、子を夫あるいは一定の年齢の大人として、愚痴を言うなどの形態が認められ、家族のホメオスターシスが働くときに、子どもがその役割を果たすことになり、あるいは子どもが大人役割、親役割を代行するといった、不適切な状況が生まれ、アダルトチルドレンが生じる原因を作り上げていくことになったということが語られていた。結果として、機能不全家族の問題が依存症、アディクションの根本原因であることが示されていた。

また、ADHDなどの発達障害や精神疾患の合併が認められることがあり、家族が面倒を見るよりも、友人との交流によって対処する中で、薬物に出会ったケースもあった。家族が適切に介入できていると、そうした友人関係よりも親子関係が密になることが考えられ、各種の依存症に出会う機会が少なかったということは考えられるが、家族自体が問題を抱えていることが多いため、家族の存在が必ずしも有利に働くとは限らないことも分かった。こういうケースでは家族からの自立が必要な場合もあることは明白である。

逆に、全く家族の問題はありませんという言い方をしている依存症者もいた。アディクションにおいては否認は一般的であり、調査の困難性を示し、データの信憑性が問われることになるが、否認に基づく回答であることは明白であるため、親子関係に限らず、対人関係に関する問題を見いだしていくようにすると、結果的に完全に過度に否認する発言が認められるため、別枠での分析を行うことにした。結果的には、回復段階である現在は問題はなかったが、以前には対人関係に問題を抱えていたことに関する発言も認められた。結果的に、一部の依存症者は機能不全家族の問題を抱えたままであることが明らかになり、回復の困難性を示す結果となった。

薬物依存症は少なくとも、違法な手段あるいは問題のある手段で薬物を入手し、刑務所に行った時期の有無は別にして、薬物犯罪で逮捕・拘留された人々であり、刑事施設における矯正教育についての考え方に特徴的な一定の方向性が認められた。刑務所などの有用性を語る依存症者もいたが、多くはDARCなどの自助グループによって救われたということ、刑務所内あるいは病院の認知行動療法によるプログラムはあまり役には立たなかったということを発表していた。

回復について、各人の回復の考え方には差があり、元のようになることが回復であるという考え方、元のような人生を否定し、新しい生き方を求めようとする考え方などの様々な考え方があった。回復が進んでいる依存症者は元のような人生を否定し、新しい生き方を求めようとする考え方を持っていた。依存症者にとって、アディクションからの回復が新しい生き方を手に入れるという考え方に基づく方が有利であることが明確になった。

学会発表など機能不全家族の問題を普及する活動について

質問紙調査、インタビュー調査は主に関東を中心とする複数の依存症自助グループで行い、アルコール依存症、薬物依存症、ギャンブル依存症の方々からの協力を得ることが出来た。

研究活動と並行して、学会発表を行った。機能不全家族の問題が依存症に与える影響について考え、学会発表などを通じて、依存症の回復手段を公表し、様々な意見を受けて、よりよい回復への支援について検討してきた。

学会発表では、依存症の方々にサービスを提供する際の問題点、関わり方について、情報交換を行い、一定の方向性を示し、一次嗜癖からの回復手段として、「1.できない・悪い自分を認める。2.自分の悪い面、良い面を理解する。3.白黒思考・全か無の思考をやめる。4.人は少しずつでも変われることを理解する。5.「～のせい」という責任逃れの考え方をやめる。6.自己決定を行う。7.他人は思い通りにならないことを理解する。8.他者から褒められたいと思う事をやめる。9.自分を認められたいための世話焼きをやめる。10.かっこつけをしない(他人によく思われなくてよい)。11.素直さを身に付ける。12.自分で自分を褒める。13.自分で自分をかわいがる。14.現実に直面して問題を解決する。15.子供の頃の親の愛情はもう得られないことを理解する。」を示し、承認欲求、白黒思考を軽減し、一次嗜癖から回復することによって、依存症、AC傾向(アダルトチルドレン傾向)からの回復を目指すことが出来ることを共有し、アルコール依存症、薬物依存症、ギャンブル依存症で共通した回復への方向性であることを共有できた。

また、断酒会、DARC、GA等の依存症者に対する自助グループで相談活動、講演などを行い、学会発表で示した回復の方向性について、納得がいく内容であったことを確認した。

まとめ

今回の研究においては、薬物依存症者、アルコール依存症者、ギャンブル依存症者共に、根底に家族の問題があることが明確になり、親、養育者の関わり方により依存症の種類が決まる可能性が示唆された。同時に、親子関係が改善できていれば、依存症になっていない可能性が示唆された。また、依存症の回復手段として、自助グループの有効性が明確になった。

機能不全家族からの回復方法、一次嗜癖の回復方法が依存症の根本的回復に寄与することが示された。このことは看護職の介入方法に結びつくものであるが、具体的な介入研究は行っていない。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

現時点では、発信力不足から得られた成果が十分なものであるという位置づけは得られていないが、関東甲信越の複数の自助グループ(県レベル)で、今回の成果に基づく回復の方向性に関心が持たれ、具体的介入について検討している状況である。

具体的な学会発表は、日本家族看護学会、日本看護研究学会、日本アディクション看護学会などで行ってきており、更に今回の成果を発表・投稿する予定である。

(3) 今後の展望

今回の成果を元に、特に親子関係が改善できていれば、依存症になっていない可能性が示唆されたことを発展させ、どのような親、養育者の関わりが様々な依存症の発生に影響を与えるかについて、今後、DARC、断酒会などを中心として、GA、クレプトマニアの自助グループなどとも連携を図りながら、様々な依存症の比較研究を質的研究、量的研究を進めていく。

また、機能不全家族からの回復方法、一次嗜癖の回復方法が依存症の根本的回復に寄与することが示されたことで、看護職の介入方法についての研究が必要であり、今後、具体的な介入研究を自助グループの協力の下、実施していく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 日下修一, 和田佳子
2. 発表標題 全家族の問題からみるギャンブル依存症への介入方法
3. 学会等名 日本家族看護学会第29回学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 日下修一
2. 発表標題 回復者支援 - ギャンブル依存症とIR法 -
3. 学会等名 日本アディクション看護学会第20回学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 日下修一
2. 発表標題 ギャンブル依存症対策とコロナ下での看護の介入方法
3. 学会等名 日本看護研究学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 日下修一, 和田佳子
2. 発表標題 機能不全家族の問題と回復に向けた介入方法 - コロナ下で看護職はDV・児童虐待にどう向き合うか -
3. 学会等名 日本家族看護学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 日下修一
2. 発表標題 アディクション看護介入の方向性
3. 学会等名 日本アディクション看護学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 日下修一
2. 発表標題 ギャンブル等依存症対策基本法の問題 - 診療報酬と看護のあり方について -
3. 学会等名 日本看護研究学会第46回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 日下修一、和田佳子
2. 発表標題 機能不全家族の問題と回復に向けた介入方法 - 看護職は児童虐待にどう向き合うか -
3. 学会等名 日本家族看護学会第27回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 日下修一
2. 発表標題 カジノ解禁とギャンブル依存症への介入方法
3. 学会等名 日本アディクション看護学会第18回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日下修一
2. 発表標題 カジノとギャンブル等依存症対策基本法の問題 - 看護の介入について -
3. 学会等名 日本看護研究学会第45回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日下修一、和田佳子
2. 発表標題 機能不全家族の問題と回復に向けた介入方法 - 児童虐待に焦点を当てて -
3. 学会等名 日本家族看護学会第26回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日下修一
2. 発表標題 家事の解禁とギャンブル依存症の問題 - 看護の介入について -
3. 学会等名 日本看護研究学会第44回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 辻脇邦彦, 松下年子, 日下修一
2. 発表標題 教育研修：困難事例の検討
3. 学会等名 第17回日本アディクション看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 赤池一将編著、土井政和、日下修一、本庄武、他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 540
3. 書名 刑事施設の医療をいかに改革するか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------